

Title	序
Sub Title	
Author	平野, 敏政(Hirano, Toshimasa)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2004
Jtitle	哲學 No.112 (2004. 3) ,p.i- ii
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集家族とその社会的生活世界の探求
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000112-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

序

本特集は「家族とその社会的生活世界の探求」と題されている。

社会的世界、生活世界といえば、社会学においてはすでに独自の意味内容を持った概念として一般的な理解が出来上がっている。

社会的世界については G. H. ミード、H. ブルーマーの象徴的相互作用論においては、意味的相互行為を可能にする意味の生成、加工、修正過程としての社会的相互作用の場として位置づけられているし、生活世界といえば誰もが E. フッサーの哲学的嘗みには、超越的主観性による厳密な学としての哲学の構築から、生活世界に基礎付けられた哲学への転回が見られるといわれているようであるが、フッサーにおけるこの転回の問題についての議論は哲学者の手にゆだねることとして、いずれにしてもこの生活世界という概念がフッサーを通して A. シュツツの現象学的社会学に受け継がれたことは否定できないところであろう。

シュツツは、社会を「もの」のように認識可能な客観的、自然科学的世界としてのみ捉えるのではなく、意味、価値、感情、身体などといった多元的現実としての知覚的（主観的）、文化的（歴史的）世界と捉え、それを間主観的生活世界と理解したのである。

また、J. ハーバーマスは目的合理性つまり道具的戦略的合理性の貫徹する資本主義経済システムおよび、国家・行政システムと、了解志向的なコミュニケーション的合理性によって形成される生活世界を対置した。ハーバーマスによれば、生活世界とは、コミュニケーション的行為の相互交換において、相互行為参加者間に構成されている意味解釈パラダイムということになる。人間の人格的形成、社会的連帯の確立、文化的伝統の維持、

序

展開は、ハーバーマスによれば生活世界のコミュニケーション的行為によって可能となると同時に、そのコミュニケーション的行為によってそれらが再生産されてもいるのである。

以上ざっと見たように、社会的世界はブルーマーにおいては象徴的相互作用と、生活世界という概念は、シュツツにおいては間主観性と、ハーバーマスにおいてはコミュニケーション的合理性というそれぞれ独自の概念と関連しておのおの独特の意味内容を付与されている。

先にも述べたように、本特集のテーマに社会的生活世界という言葉が使用されているわけであるが、すでに明らかのことと思うが、本特集で使用している社会的生活世界という言葉は、ブルーマー、シュツツ、ハーバーマスなどがいう社会的世界や生活世界の概念そのものを意味してはいないということを了解してほしい。

したがって、「家族とその社会的生活世界の探求」という本特集のテーマは、ブルーマー、シュツツ、ハーバーマスらの社会的世界、生活世界の概念の意味内容を面影にしつつ、家族および家族を取り巻く日常生活の諸問題をとりあげようというところにその意図があるといえる。とはいえ、このような広範な問題すべてにわたって検討を加えることは到底不可能である。事実、本特集は論文4、研究ノート2、資料1から構成されているが、それらが検討している分野は、テーマとして掲げた領域の一部分にとどまっている。しかし、本特集の構成と収録されている論文、研究ノート、資料（年表）から、本特集の意図を汲み取っていただければ幸いである。

平成16年2月12日

文学部教授 平野敏政